

して布教を開始する四年前から、大阪布教を開拓した初代白神新一郎に導かれた御園ヤエが神習教に属して布教をしており、両者の間には葛藤が生じた。畑にしてみれば御園の行為は「吾主祭の神を奉斎し同教異名の教会」と映り「権利上の屈辱」であったが、逆に御園にしてみれば「白神先生のお道案内」を広めることが重要で、所属がどこであるかは二の次だっただろう。この事例でも分裂状況は長期に及んだが、最終的に御園は明治四〇年になり金光教に転属した。

山口と東京の分裂状況は、信仰中樞や宗教様式が未確立の状態で自然発生的に布教地が拡大していった金光教の組織形成期の実態の一端を示していると考えられる。そして、各地の布教者とその信者にとって、信仰の存立基盤として、神道金光教会の存在よりも地域の関係性や信仰の導き関係が優先する場面もあった。一方で、彼らの金光教帰属を可能にしたのは、分裂が信仰上の決定的差異によるものではなかったためと史料される。

以上の黒住教と金光教の事例は、信仰中樞（本部）が周縁（地方）に対して二元管理を実質化していく過程において、周縁で動揺や分裂状況が生じたものであり、創始者による創唱性の度合いが高くて自然に収斂していくのではなく、集団の一元化は容易でなかったことを示している。加えて、これらは大局的にみれば神道事務局体制が崩壊し、神社・講社及び旧教導職らが流動化する中で、各派でその内実が形成され境界線が明確化する過程での動向に位置付けることができ、そこで生じた地域における神道をめぐる様々な越境の一例でもある。こうし

た状況を考慮しながら、金光教や黒住教が「純粹派」「樹木モデル」等と析出される特性を有するに至るプロセスや力学を改めて検討する必要があるだろう。

実行教の組織化における非富士信仰的要素

今井 功一

実行教は、彼らが信仰の祖とする富士行者・角行による「もとのちはは」という世界創造にかかわる神々を「天祖參神」すなわち天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神の「造化三神」に読み替える等、富士信仰の一形態である不二道にそれ以外のものを取り入れた。

組織の面では、実行教の前身である不二道は小谷縁行三志、理性院行雅といった「大導師」と、同気と呼ばれる各地の信徒の間のネットワークの集合であった。教派神道としての実行教は、管長世襲に象徴的にあらわされるように政府あるいは国家のそれを写すことで成り立っていた。教義の面ではなくそうした組織のうち教師養成部門に着目すると、明治三〇年前後にそれらの成立を主導したのが漢学者である勝屋馬三男（一八六九—一九三三）や国学者である金丸俊胤（一八五九—一九二二）といった富士信仰以外にルーツを持つ実行教本館の幹部であった。実行教は明治二〇年代から富士信仰系という枠あるいは一教団の枠を越え、月刊誌『惟一』を媒体として「神道界全体」の改革を目指していた。実行教の教師養成に対する態度や実行教本館の動きは『惟一』を舞台に展開されていく。

「布教伝道スル教師ハ教義宗旨ニ精通スルノ外尙尋常中学校

相当以上ノ学識ヲ具備スル」よう示された明治二八年五月三日の内務省訓令第九号に呼応して、『惟一』編集人で実行教本館幹部の勝屋馬三男が、同六月の第二一号に教師の質を問う論説「天下の冗教師を淘汰せよ」を、同一〇月には教師検定法とそれについての論説を発表した。明浜と号し、咸宜園最後の塾主として知られる勝屋馬三男は、明治三年から二六年九月まで私塾で漢学教授、私立有隣学館と真宗振風校で漢文を教授した後、明治二十七年に上京した頃から実行教本館に所属していた。明治二月には新たに整備された教師検定法にもとづき、本教師第一回試験が施行された。勝屋は「本館教師試験員」に後に第三代管長となる柴田孫太郎とともに任命され、制度整備にとどまらずその実行も担当している。勝屋は明治二九年二月には教史の編纂と「教學寮」設置の必要性について論説を発表したが、同年一〇月、塾主として咸宜園に戻ることとなり実行教本館を去った。

勝屋が実行教を去った後、実行教本館幹部として教師養成を主唱したのが金丸俊胤である。宮内省宮内官などを務めた佐賀出身の国学者である金丸は、勝屋の後継として編集を務めた。金丸は、編集者としてではなく一寄稿者としてあるいは読者として以前から『惟一』の誌面刷新、教団改革を求めており、第三二号（二九年二月）から編集人に就任すると『惟一』に誌面改革の一つとして誌上講義「講義録 古事記上巻講義」と題された連載を開始し、教師の質確保のための方策をとった。だが、そこで注力された科目は「古事記」であり「万葉集」であり、富士信仰教団としての実行教の姿は薄く感じられる。金丸

はその後、伊那を中心とした多くの信徒と共に教育勅語奉賛のための組織である大日本実行会を組織し、実行教の分裂をもたらした。伊那の信徒が「御恩礼式」や「不二道」と無関係な教会講社の増加を嫌ったためともいわれるが、同時に彼らは富士信仰教団であることを捨てたのである。

実行教においては柴田家や不二道以来の古参信徒ではなく、神道教団としての実行教に参加した国学者や漢学者が編集者あるいは発行者、印刷者として教団内部で活躍し、教師検定法や教學寮などを整備していった。しかし勝屋にしても金丸にしても教団に残ることはなかった。彼らの去る先は勝屋の場合は咸宜園であり、金丸の場合は大日本実行会であった。神道界全体の改革が志向する普遍性と富士信仰系教団としての独自性の間の葛藤は、分裂の可能性をはらむものであった。

大成教に包括された近世教化活動

萩原 稔

本発表では、近世末期までには成立していた教化活動が、明治初期の教導職制度とその変容である「教派神道」に対応していく過程について考察したい。なかでも、その組織としての統一性が弱いとされ、それゆえに包容性が高いともいえる大成教会・神道大成教を軸にして、そこに包括されることになった井上正鑑に発する禊教、横山丸三に発する洵宮、そして心学と俳諧の結社の事例に注目していくことにする。

禊教は井上正鑑（一七九〇—一八四九）が、天保十一年（一八四〇）に創始した「祓修行」に起源があるが、孫弟子の東宮